28

細菌グラム染色の本邦における初期の紹介について

会田　恵
会田内科医院

細菌のグラム染色（以下「本法」）は現在の細菌感染症の迅速診断に有用な手段として日常臨床に広く利用されているが、この染色法の発見は一八八四年（明治十七）Christian Gram（ベルリン市民病院）がC.Frieländerとの共同研究により発見した事はよく知られている。

本法の本邦への最初の紹介は、矢部辰三郎が一八八五年（明治十八）東京医事新誌に三回にわたり「バクテリア病理一班」と題して細菌検査法を述べているがその中で「組織内バクテリアの着色法」の項で本法に触れており「バクテリアと組織トヲ異色ニ染ムル簡明ノ良法ハグラム氏ノ法ニテ切片ヲ水中ヨリ撮出シ（後略）」とある。続いて一八八七年（明治二十）には同じく矢部が「ばくてりあ病理新説」と題して米国のH.Grdle「Bacteria and the Germ theory of Disease」（一八八三）を訳し出版してるが、この中でグラム氏については前掲の発表同様の記載である。

また一八八六年（明治十九）には今井政公が「病床顕微鏡検査新説」と題してC.Frieländer及びZieglerの書より訳補として出版し、この中で「此法ハ分裂黴菌ノ外尚細胞核ノ染色依然残留シテ速ニ識別シ難キガ故ニ間グラム氏ノ法ヲ撰用スベシ然ルトキハ細胞核ヲシテ全ク脱色セシメ且兼テ分裂黴菌ノ色素ヲ保持セシムルヲ得ベシ」と述べている。

細菌学の書籍は一八九一年（明治二十四）の遠山椿吉校訂田中豊、小松勘蔵共訳「應用黴菌学」に始まりその後次々と出版されるのであるが、一九〇〇年（明治三十三）出版の遠山椿吉、植村碩三郎纂訳「新撰黴菌學總論」では「グラム氏着色法」の項では組織切片の染色での識別は述べてはいない。また一九〇三年（明治三十六）出版の北里柴三郎校閲淺川範彦著「増訂実習細菌学」では「グラム氏切片染色法」として本法

の染色法が「特別切片染色法」の項に入っている。一九〇五年（明治三十八）出版緒方正規校閲児玉豊次郎著「実用黴菌学」ではグラム染色法の章で「（一）塗抹標本ノ染色法」を次に「（二）切片標本の染色法」を述べその項で「グラム染色ニ依リテ染色スル病原菌」と「グラム染色ニ依リテ脱色スル病原菌」の項に夫々の菌名を並べている。続いて本法の報告されている改良法を六種あげている。このように切片染色の特別染色法として本法が述べられているのは一九〇八年（明治四十一）出版の志賀潔著「臨床細菌及び免疫学」にもみられる。その後一九一七年（大正六）出版の志賀潔著同書（増訂六版）になると「グラム染色法ハ主トシテ細菌鑑別ニ供ス又染色シ難キ細菌ノ染色ニ応用ス。」とあり組織切片の染色については全く述べていない。

以上は細菌学者の内容の一部に本法について述べられていた主なものであるが、一九一〇年（明治四十三）には名倉正志が「グラム氏染色法ニ就テ」として二十頁に及び詳細に述べている。（中央醫学会雑誌九十号）緒言の一部であるが「吾人臨床上最モ必要ナルモノニシテ然モ最モ簡単ナルモノヲ染色法トス殊ニ類似菌鑑別法トシテ臨床上最モ屢々用ヰラレ最モ價値多キモノヲグラム氏染色法トス出デ之レヨリグラム氏染色法ノ歴史ヲ述べ次デ余ノ研究事項ヲ述ベン」と述べ後述の記述には「然ルニ之レヲ鏡験スルニ切片中ニ存在スル一種ノ細菌ノミハコノ際脱色セズ却テ非常ニ強ク暗色ヲ呈スルヲ見タリ之レ實ニ菌体内ニ於テ沃度ノ為メ不溶解性ノ色素沈着ヲ來シタルニ依ルモノニシテグラム氏ハコノ法ヲ應用シテ細菌ノ着色ヲ損スルコトナク組織細胞核ヲ脱色セシメタリ之レニ依テ之レヲ見レバグラム氏染色法ハ固有ノ染色法ニアラズシテ却テ脱色法殊ニ核脱色法ト云ハザルベカラズ」と本法の機序に言及した最初の発表となっている。

以上本法が本邦に最初に紹介されてかの、応用の進展を文献により調査したものである。